

北海道FDSDフォーラム2023 個人発表一覧

発表タイトル	発表者氏名	所属	発表概要
Student perceptions of an English conversation space	Andrew Johnson	Future University Hakodate	Connections Café is a social language learning space at Future University Hakodate which aims to create a positive environment for students, regardless of their English level, to communicate in English. Its core activity, small-group sessions, is offered seventeen times per week and provides students with opportunities to interact with an English-speaking facilitator. With the purpose of learning how students perceived the space and the sessions, a survey and interviews were done in the 2022 spring semester. Questions pertained to students' intentions to use English in the future, perceived changes in English language skills, reasons for attending or not attending, and activities that would encourage them to attend in future semesters. Results showed that small-group session attendees, compared with non-attendees, self-reported significantly higher increases in confidence and enjoyment of speaking in English. Furthermore, attendees also self-reported increased listening skills, increased appreciation of English as a communication tool and less fear of making mistakes when speaking in English. The survey also found that common reasons reported for not attending were being uncomfortable with new people, feeling anxiety about making mistakes, and perceiving the space as only being for people proficient at speaking in English. Summaries of the quantitative and qualitative analyses will be presented, as well as a discussion on how the results were utilized in the 2023 academic year.
100%英語で行う授業での日本人学生対策	飯田 良親	北海道大学	アントレプレナーシップを学ぶビジネス基礎講座(4日間の集中講義)を100%英語で実施している。受講生は留学生、日本人学生ほぼ同数で、学部1、2年生が履修している。授業はグループ学習が多く、留学生と日本人混成のグループを作っている。履修後のアンケートで、「日本語での補足が欲しかった」との意見があり、今年度は講義概要を15分の日本語ビデオにし、事前に学生が視聴できる反転学習の準備をした。公平を期すため、同じ内容の英語版ビデオも作成し、留学生にも公開した。
学生相談における危機対応の課題	石井 治恵	北海道大学	危機対応は、学生の生命と安全に関わる重要な分野であると同時に課題の残された分野でもある。石井他(2023)は、学生相談実務者の視点から危機対応の課題を類型化する質的研究を行い、危機対応の課題は、「阻害要因」とその【背景となる現状】の2テーマに集約され、「行動原則の未確立」が根本的な【阻害要因】である可能性を示した。 本発表は、石井他(2023)の研究で抽出された「行動原則の未確立」という課題を掘り下げ、学生相談スタッフに必要とされる危機対応時の行動原則を考察し、学生支援に関心を持つ教職員と共有することを目的とする。
生成AI時代の情報リテラシーを考える： ChatGPT等による「検索」と「要約」の可能性と課題	遠藤 健太	フェリス女学院大学	本発表では、生成AI時代の情報リテラシーのあり方を考察しながら、大学の研究・教育におけるChatGPT等の活用方法について検討する。特に情報の「検索」と文献の「要約」というタスクに焦点を当て、それらのタスクにおけるAI導入の可能性と課題について多面的に論じる。また、ChatGPT等が出力する誤情報(hallucination)を「教材」として有効活用する試みなどを紹介しながら、教育活用の可能性についても検討する。昨今のディープフェイクの蔓延等の問題も念頭に置きながら、生成AI時代のリテラシー教育において大学が果たすべき役割を議論する機会としたい。
看護教員と実習指導者が学び合う「協働学習会：よりよい看護学実習について共に考える会」を通じたFD活動	奥野 信行	京都橘大学	看護学実習は、看護学生が病院などの臨床現場に身を置きながら、既習の知識・技術を基に患者・家族への看護実践を展開しつつ、そこで生じた現象を教材として、看護実践能力を修得する「授業」である。近年、実習環境や看護学生が変化する中で、看護学実習という「授業」における教育の質を高めるには看護教員と実習指導者双方の「教育・指導能力の向上」と「連携の強化」が重要であると言われている。私たちは、この2点を推進するために、看護教員と実習指導者による「協働学習会」を実習施設である京都市立病院・看護部と年間5~6回運営し、実習指導に関する知識・スキルの学習や事例検討、学生指導のシミュレーション学習等を実施している。看護学実習を担当する看護教員のFD活動としての本学習会の意義や可能性について報告する。
ポストコロナの地域ボランティア論	西郷 達雄	北海道医療大学	北海道医療大学心理科学部には、1年生早期に外部実習を行う「地域ボランティア論」という授業がある。新型コロナウイルス感染症の影響により3年間(2020年-2022年)、ボランティア実習が中止となっていた。2023年からは、青少年体験活動施設を利用し、体験型ボランティア実習を行った。本発表では、実習が中止となっていた期間(2020年-2022年)と体験型ボランティア実習を行った2023年で得られた学修成果をまとめ、ポストコロナにおけるボランティア教育について報告する。
大学基礎科目の物理学におけるPBL型授業の試み	斉藤 準	帯広畜産大学	物理学の大学基礎科目において、一部の回でPBL(Project/Problem-Based Learning)型の授業を試行的に実施した。PBLの原理はオールボーモデルに倣った。学生は科目のテーマに関連する2課題および自由課題をグループごとに選択して取り組み、グループ内で実験、理論構築、分析を分担し、JupyterHubを利用してレポートを作成した。生成AIの利用は可とした。この試みについて、主に学生の授業評価に基づき、課題と展望を報告する。

ICTと英語学習	城山 友孝	名古屋大学	本研究は、異なる2つのメディア:オンラインチャットとフォーラムを活用して英国人大学生と初中級のオンラインインタラクションに焦点を当てた実践的な研究である。過去の研究では学習者同士のインタラクションに焦点を当てていた。当研究は海外の大学と実際に繋ぐことによって語彙能力にどのように貢献するかを検証した新規性の研究であった。 本研究の結果はオンラインチャットもフォーラムも語彙の多様性には効果が得られなかった。考察としては語彙を実際に使うためには「読む能力、意味、使い方」が分からなければならないがpre-intermediateの学習者の場合、単語の意味をただ日本語で知っているだけに留まっている傾向が多い。そしてネイティブとのインタラクションでは日本人学習者が意味のわからない語彙に当たった場合に意味交渉をせずにネイティブが簡単な語彙で言い換えてしまう傾向が見られたので日本人学習者は多様な語彙を使用していなかったと考えられる。その結果、ネイティブと日本人学習者のオンラインインタラクションでは語彙能力向上には貢献しないのではないかと考えられた。
生成AIにいかに対応するか:教員のための実践的研修プログラムの設計と課題	立花 優	北海道大学	本発表では、生成AIへの教育現場での対策を探るために実施された教員向け研修プログラムの設計と課題について考察します。具体的には、生成AIの利用状況を把握するための学内アンケート調査の実施、その結果を基にしたワークショップの設計と実施、そして参加者の反応と改善点について報告します。生成AIの影響を理解し、それに対処するための戦略を模索する中で、報告者自身も多くの疑問と挑戦に直面しています。本発表を通じて、現在進行形の問題に対処するための研修設計の問題点や見直しについて議論したいと考えています。
生成系AIと共生した数理データサイエンスAI教育プログラム	二瓶 裕之	北海道医療大学	生成系AIと共生した数理データサイエンスAI教育プログラムを実践しています。生成系AIとしてはgtp-4モデルを使用し、API経由で、学びの場面に応じた役割を演じさせました。例えば、学生を演じるAIがグループワークに参加したり、教員を演じるAIがレポートを添削したり、医療分野で活躍するエキスパートを演じるAIが相談相手となっています。AIと共生した学びを通して、AIに対して批判的観点を持つことが、AIを活用するスキルの修得につながることを学生へ伝えたいと思っています。
グループワークとしての実験作業を取り入れた理工学部新入生向け導入教育クラスの実施	長谷川 誠	公立千歳科学技術大学	理工学部新入生を対象とする導入教育クラスとして、簡単な実験作業をグループワークとして取り入れたプログラムを実施している。クラス内でのコミュニケーションネットワークを早期に構築させるとともに、簡単な物理実験や回路製作、レポート作成など、理工学部の学生として早期に経験させておきたい内容を取り込んでいる。その日の実施内容が何をねらいとしているかという授業設計上の意図を伝えた上で取り組ませることで、各学生の参加意欲を引き出そうとしている。ここでは、実際の実施内容を紹介します。
ChatGPTを利用した次世代プログラミング教育:医療AI人材育成での試み	平田 健司	北海道大学	医療におけるAI(人工知能)の利用は避けては通れない道です。北海道大学は東北大学、岡山大学と連携し、文部科学省の補助金のもと医療AI開発者養成プログラム(CLAP)を展開しています(R2-6年度)。本プログラムでは、医療の専門家がプログラミング技術を習得し、現場の医療課題に即応できるAI開発能力を身につけることも柱の1つとしています。ChatGPTの力を借りてプログラムコードを自然言語から作成する新たなアプローチを取り入れたセミナーを開催しましたので、その詳細を紹介します。
日本の高等教育における外国人ティーチング・アシスタント(TA)の利点 - 教員とTAからの考察	マズル ミハウ	北海道大学	日本の高等教育の国際化の進展に伴い、留学生数が増加するだけでなく、留学生をサポートする国際的背景を持つティーチング・アシスタント(国際TA)を雇用する機会も増加している。先行研究では、国際TAからの知見が明らかにされているが、本研究では、そのフォローアップとして、国際TAのサポートを受けて授業を実施した教員の経験を調査し、教育経験向上のため今後国際TAのさらなる活用の考察を提供するものである。
教職員、学生を対象にしたChatGPTセミナーの実践と課題	松浦 年男	北星学園大学	北星学園大学では生成系AIの台頭を受け、FD、SD、学習支援セミナーの一環としてChatGPTセミナーを行った。セミナーでは昨今の生成系AIの動向とChatGPTの特性を紹介したうえで、ユーザー登録から行い、設定した課題を行う時間を多く取った。本発表では主に人文社会系の専攻を持つ大学における実践での工夫や、複数回のセミナーを行う中で見えてきた課題について紹介し、今後の展開について検討する。
オンライン授業の後遺症~共感力の停滞~	三浦 真琴	関西大学	報告者は面接・オンラインの別を問わず、グループワークを主軸とした授業を展開している。コロナ禍を経て全学的に対面形式の授業となった今、自分の意見を一方的に告げるだけで他のメンバーの言動に注意を払わないばかりか、教師や先輩のアドバイスに頷くことさえできない学生が散見される。これは他者との接触機会の減少がもたらした共感力の停滞と捉えられるが、この事態に如何に対処するのか、実践を報告すると共に参加者からのアイデアを募りたい。
クラウド型学習環境での大人数授業の運営-受講生・担当教員双方にとっての共同編集-	山口 好和	北海道教育大学	COVID-19以降、小中学校から大学に至るまでクラウド型学習環境の導入が進んだ。本学でもGoogle WorkspaceやMicrosoft teamsなどのコンテンツ管理環境を活用して、教材配信や学習成果の共有がなされている。その一方で、従来からあるLMSとの共存、分担も考える必要がある。本報告では、1年生向け必修教養科目で行ったGoogleの各種ウェブアプリ活用の実績を元に、300人前後の中・大規模講義において採り入れやすい共同作業の方法について考察する。

ICTを利用した海外学生とのEタンドム ーポストコロナの国際教育につなげるにはー	山田 直子	筑紫女学園大学	2020年に導入した海外学生とのタンドム学習の実践事例を報告する。タンドム学習とは母語の異なる2人がペアになり、互いの言語や文化を学び合うという学習形態である。コロナ禍では国境を超えた学生の行き来が滞る中、学生が文化背景の異なる他者と主体的に関係を築き、言語や文化の違いに配慮しながら行動できるような力を養う方法はないかを模索した。取り組みのデザイン、導入、授業運営、改善のプロセスを報告し、実践を通して明らかになったコロナ前の国際教育の課題について議論する。
大人数講義におけるzoomを用いたグループワーク	芳中 千裕	大阪経済法科大学	法学部の大人数講義(100名以上)において、対面授業の中でICTツール(zoom)を用いてグループワーク(TBL)を行い、講義内容への実践的な理解を深める取り組みを紹介する。大人数講義は一般に受動的な座学として行われ、法学部ではとりわけ、伝統的にその傾向が強い。そこでこの取り組みでは、対面授業にzoomを取り込むことによって、大人数におけるグループワークを成立させ、アクティブラーニングを実現した。法学部ではとりわけ、理系学部とは異なり、大人数講義でのチューター等による補助はほとんど期待できない。しかし、この取組みで実践した方法では、授業担当教員およびゲスト講師の2名により、ほぼスムーズに授業を進行することができた。

※緑はオンラインでの発表者